

## 戦争を知らない世代へ

### 平和の尊さを伝えたい

鹿島 孝治

#### はじめに

昭和20年(1945年)8月9日午前11時2分。私が当時の国民学校2年生<sup>1</sup>(8歳)の時です。長崎市新中川町という、爆心地<sup>2</sup>から約<sup>3, 4</sup>キロメートルの地点で被爆<sup>3</sup>をしました。いわゆる遠距離被爆者です。

#### 長崎で被爆

庭で、かまどに使うたき物を小さく割っているとき、急に「ピカッ!」とすべてが青白く光り、その光が消えないのに驚き家の中へ逃げ込もうとしました。

「ドーン」という大きな音がして、私は玄関の扉と一緒に、家の中に吹き飛ばされました。気が付くと、ダンスは倒れ、畳はめくれ、天井が垂れ下がっていました。一面ガラスの破片で、その上を裸足<sup>4</sup>のまま防空壕<sup>5</sup>へ避難<sup>6</sup>しました。私に大きなけがはありませんでした。今でも信じられません。

爆心地から1・2キロメートルのところでは、木造家屋が一瞬にして倒壊し、熱線<sup>7</sup>で火が付き、生きながら多くの人が焼け死にました。

被爆した人たちが救助を求めて、救護所となった伊良林国民学校に集まってきました。私の家は校舎のすぐ裏にありましたので、様子をうかがうことができました。

最初は、比較的けがの軽い人たちでしたが、そのうち重傷の人たちがトラックで次々と運び込ま

れて来ました。

教室の中は重傷の人たちが横たわり、傷口が膿<sup>8</sup>み、そこへウジが湧<sup>9</sup>いたそうです。たくさんの人たちが亡くなっていくさまを見ました。校庭ではその人たちが茶毘<sup>10</sup>に付され、連日連夜、赤々と燃える炎が忘れられません。

学校再開後、私たちは校庭で、収納できなかった小さな骨拾いを行いました。特に雨の後は、多く見つかりました。

原爆は、広島と長崎を一瞬にして死の街に変えました。赤く焼けただれてふくれあがった屍<sup>11</sup>の山、黒焦げ<sup>12</sup>の満員電車、眼球や内臓の飛び出した死体、いったんは死の淵から逃れた人も、また家族探しや救護にかけた人たちも放射能に侵<sup>13</sup>され、次々に髪が抜け、血を吐いて倒れていました。

当時、長崎市内には約24万人が生活していましたが、そのうち約7万4千人の尊い命がその年の暮れまでに奪われ、約7万4千人が負傷と記録されています。

#### 終わりに

核兵器の全面廃止と根絶を目標とした核兵器禁止条約<sup>14</sup>が2017年7月7日に、122カ国の賛成多数で採択されましたが、まだ発効には至っておらず、世界には現在も、1万4千発近くの核弾頭があるとされています。これは地球上の人間を5、6度も、全滅させる保有量です。また日本が、核兵器禁止条約に批准<sup>15</sup>をしていないことは残念ではありません。

核兵器による戦争が一度起きてしまえば、被害は国境を越えて広がり、どんな機関もまた国家も救援のすべを持ちません。

核兵器廃絶に向けて、核兵器禁止条約が採択さ

れた2017年を「核兵器の終わりの始まり」と

するために、核兵器も戦争もない世界とするため

に、また、戦争を、原爆を知らない子どもたちに、

命の尊さ、平和の大切さを伝えるために、私はこ

れからも活動が続けていきます。

〔広報伊丹〕令和元年8月1日号掲載

「現在の小学2年生。

① 原子爆弾などの核兵器の爆発の中心地。

② 爆撃及び原子爆弾や水素爆弾で被害を受けるこ

と。直接被爆は、原子爆弾が爆発した当時に爆心

地付近にいて原子爆弾による被害を受けること。

③ 死体を焼き、残った骨を埋葬すること。

④ 将来的な核兵器の全廃へ向けた、核兵器を包括

的に法的禁止とする初めての国際条約。締約国に

よる核兵器等の開発・実験・生産・製造・取得・  
専有・貯蔵を禁じる。なお、非締結国への法的拘  
束力は無い。

1996年4月に起草され、2017年7

月7日に国連総会で賛成多数にて採択され、2

020年10月24日に発効に必要な50か国の批

准に達したため、2021年1月22日に発効

となった。